

学校教師に招聘され渡印し、傍ら壁画模写に従事したもので、大正六年十一月十五日、細川侯の援助でインド旅行に行く片山南風とともに出発した。桐谷洗鱗は印度研究会より壁画の模写を依頼されてアジャンターに赴いた。

沢村はそれらの監督を依託されていたが、ほかに本校からもアジャンター石窟壁画の調査を依託された。彼は、大正六年十月二十六日に出発し、十二月一日にボンベイに到着。帰国は翌七年五月十七日である。帰国後、『東京美術学校校友会月報』第十七卷第四、第五号に寄稿した「アジャンターの生活」には石窟に至る道中の模様、壁画のありさま、虎や野猪、蝙蝠の出没、インド人画家らとの交流のことが詳しく記されている。彼はムクル・チャンドラ・デー（タゴールの来日に同行した画家）とともにアウランガバットの窟院やドルタバートの古城、エローラやナーシックの石窟なども訪れた。

壁画の摸本は大正七年三月国華社に到着。同年十月日本橋倶楽部で展観がなされ、同時に沢村将来のアジャンター石窟銘文、文様の拓本も陳列され、瀧精一と沢村専太郎の講演があった。『国華』第三四一号（大正七年十月）に詳しい記録がある。大正八年には大阪朝日新聞社、京都帝室博物館でも展観された。なお、沢村は大正七年に『国華』第三四一、三四三、三四五号に「西印度ガトートカッチ窟院について」を、また、大正十年に至って同誌第三七七、三七八、三八三、三八五、三九三、三九六号に「アジャンター石窟寺の彫刻的文様について」を発表している。

① 狩野芳崖碑建立

大正六年十一月四日、狩野芳崖の三十回忌の前日に谷中長安寺の墓の傍らに故人の遺徳を称える碑が建てられ、追遠会および遺作展観が同寺で行われた。碑は浜尾新の篆額、三島中洲の撰文。